

駒ヶ根市文化財

名称	菅の台の七名石
種別	民俗・芸能
所在地	赤穂北割一
説明	<p>駒ヶ根高原の菅の台、切石公園には、切石・重ね石・地蔵石・袋石・小袋石・ござ石・蛇石(へびいし)と名の付いた石があり、七名石と呼んで里人に親しまれてきた。高遠藩の儒者中村元恒(もとつね)が著わした『伊那志略』には、奇勝としてこのうち疱瘡石(ほうそういし)(重ね石)・地蔵石・小袋石があがっている。</p> <p>切石は、刃物で縦に切ったように真二つに分かれており、武蔵坊弁慶(坂上田村麻呂ともいう)が試し切りしたとか伝えられていて、切石原・切石公園の名称の起源となっている。</p> <p>重ね石は、横に切ったように二つ重なり、重なり目に一本松が生えている。下の石の表面がぼくぼくしているところから疱瘡石と呼び、また傍らの石に蚕玉様を祀っているので蚕玉石ともいう。この石を擦(さ)すると疱瘡を病んでも軽くて済むと言われた。</p> <p>地蔵石 地蔵石は、石を穿って子育(こそだて)地蔵が祀っており、「明和八年十一月二十四日 願主西安」と刻まれている。西安(せいあん)は北原水上氏の内庵にいた行者と伝えている。明和8年は1771年である。</p> <p>袋石は、遊水池の中にあり、米をいっばいつめた穀袋(こくぶくろ)の形をしている。 小袋石は、小袋井の北岸にある。</p> <p>ござ石は、切石遊水池取入口の北西にあり、表面が平らで、ござの目に似た筋がついている。</p>



切石



重ね石



駒ヶ根市文化財

蛇石は、駒ヶ池の南、山林中にあり、蛇のような形をしている。

これら巨岩(木曾駒花崗岩)を七名石と呼んでおり今から約6万～9万年前、千畳敷カール付近から氷河に押し出され、山稜付近から中御所谷のしらび平まで運び出された。そして氷河の届かなかった下流菅の台までは、洪水時に土石流として太田切扇状地まで運ばれたもので、自然が創りだした貴重な遺産である。ヨーロッパでは、氷河が融けて置き去りにされた石を「迷い子石」と呼んでいる。七名石はいわばそれである。